
IS ~ インフィニットストラトス ~ 黒騎士は織斑一夏

AST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニットストラトス〉黒騎士は織斑一夏

【Nコード】

N7189X

【作者名】

A S T

【あらすじ】

変態腐れニート神との決戦で彗星に押し流されたマキナは、偶然にも円環から弾き出されてしまう
気が付けば、彼は織斑一夏として未知の世界に生まれていた。
この小説は一夏がマキナだったらカッコ良くな？という妄想から生まれた駄文ですので期待しないでください

第一話（前書き）

とうとう書いてしまった連載小説
どこまでいけるか分かりませんが
不安だらけのこの作品にお付き合いいただけるのでしたらお願いします。

第一話

ギロチンの刃に自分の首を飛ばされ敗北しながらも、やっと自分の名を思い出せた事

自分を創り出した腐れニート神との決戦で流星に押し流された自分の体が何処かへと墜ちてゆく浮遊感

ずっと墜ち続けた自分が新しく生まれ落ちた瞬間の光

「この子の名前は

」

第一話

織斑一夏は前世の記憶というものがある。

否、気づいたら新しく生まれ変わっていたという表現が正しいだろう
前世の彼であったのなら即座に死を望み、座に存在する変態ニート
神を呪っていただろう

だが、この身は前の様に死んだ身の姿では無く

織斑一夏という人間の肉体であり前世の姿では無い
かつてマキナと呼ばれ、本当の名をミハエルと呼ばれた彼の前世は
やっと死ぬ事が出来たと言う事だ。

ならば自分は織斑一夏としての人生を生きてゆこうと決意した。

まあ、ここまでは良かった。

軍事転用された宇宙用マルチフォーム・スーツ、インフィニット・
ストラトス、通称IS

篠ノ之束によって開発され、女性しか起動できないと言う欠点の為に女尊男卑の社会を生み出した。

現在はスポーツとしての形で落ち着いている。

そして国連によって造られたISの操縦者を育成する学園、IS学園

「何故、俺はここに居る・・・？」

そう呟き、周囲を見回す。

かつて小学生のころに分かれ、和風美人となった幼馴染に目をやる
と目を逸らされた。

本来、男である筈の一夏がここに居るのは、受験会場を間違え、偶然ISに触れたら起動してしまったからだ。

クラスメイトは全員女子、この状況を悪友の五反田弾に言ったら
それ何てギャルゲー？と心底羨ましそうな視線を浴びせながら言っ
たのを覚えている。

その時は「そうか・・・」と素っ気無く返したただだったが、
この気まずさと居心地の悪さの中で新しい人生の青春時代を過ごす
のかと考えると

今なら言える。

今すぐ代わってくれ！と

「———くん、織斑一夏くん」

「む・・・？」

気が付けばクラスの副担任である山田真耶が自分の名前を呼んでい
た。

「あ、あの、大声出しちゃって、ごめんなさい。あの、お、怒って
る？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！で、でも自己紹介、『あ』から始まって今『

お』なの・・・

だから、織斑君の番なんだよね、だからね、ご、ゴメンね？自己紹
介してくれるかな？」

ダメ？と涙目になっている山田先生を落ち着けてから自己紹介をす
る事にした。

「・・・落ち着け」

「は、はい！」

ぶっきらぼうな一言の筈なのに

何故か年上の男性に優しく言われた様に感じた山田真耶は頬を紅く染めながら答えた。

自己紹介をするべく一夏は席から立ち上がった。

「織斑一夏だ。・・・よろしく頼む」

彼の自己紹介終了

「えっと・・・以上ですか・・・？」

「これ以上、言葉で語る意味は無い」

キーン！！

多分、クラス中にそういう擬音が聞こえた気がする。

これが普通の男子なら単なる格好付けだと思われるだろう

しかし、一夏の多くを語らない寡黙な大人の男を感じさせる所

所謂ハードボイルドな男の雰囲気は漂っていた。

クラスの女子たちは自分達と同年代である筈なのに、

はるかに一回りも二回りも年上の大人であるかのように感じさせる

一夏にときめきを覚えた。(個人差はあるが)

「お前がそういう性格なのは分かっていたが、自己紹介としてそれはどうなんだ？」

その言葉と共に教室に入ってきたのは、

一夏にとって唯一無二に家族にして、幼い自分を学生の身でありながらも必死に自分を養ってくれた大恩ある実の姉

世界一のIS操縦者と名高い織斑千冬であった。

彼女の頬がやや赤く染まっているのはどうしてだろうか？

「すまないな、山田君。挨拶を押し付けてしまって・・・」

「いえ、これ位の事は・・・」

取り敢えず座る一夏

「全く・・・お前はもう少しマトモな自己紹介は出来ないのか？」

「・・・姉さん」

スパアン！と出席簿で頭を叩かれた。

「ここでは織斑先生と呼べ、いいな？」

「・・・分かりました。織斑先生」

その後、すぐにクラスのミーハーな女子達が騒ぎ出したりしたが、一夏は我関せずと言った様子で居たのだった。

第二話（前書き）

続きです。

素人の駄文を読んでもくださり、ありがとうございます。

第二話

授業が終わり少しの間の自由時間となった。

一夏はひたすらに腕を組んで目を閉じていた。

彼の周囲にいる女子達は話しかけたい様だが、良くある誰が話しかけるかで言い合っていた。

すると彼女達とは別の女子が一夏に話しかけた。

「ちよつといいか？」

閉じていた眼を開けて声の主の方を見る。

「・・・ああ」

短い返事を返し、席から立ち上がる。

「ここは人が多い、屋上で話そう」

教室の至る所から残念そうな声が聞こえたが、一夏は気にする事も無く彼女に連れられて行く

第二話

人気の無い一年校舎の屋上で一夏は久しぶりに再会した幼馴染と二人きりでした。

「久しぶりだな、篝。六年振りか」

「ああ、お前も相変わらず無口なままだな」

「・・・饒舌な方が良かったか？」

「いや、それはそれで何か気持ち悪い」

「・・・随分な言い様だな」

少しムツとした感情が声にも伝わる。

どうやら一夏の感情は顔で無く、声に出るらしい

「・・・まあ良い、教室で一目見てお前だと分かった。」

「そ、そうか？」

「髪型、眼、雰囲気・・・こんな所か」

箒は顔を照れくさそうに自分の髪の毛を弄っている。

一夏は彼女との記憶を思い返していた。

自分の拳は強すぎた。

だから彼女の実家である神社の道場で剣道を学び始めた。

そこで共に剣を学び高めあった幼馴染

姉妹揃って人付き合いが苦手で両親が悩んでいた事も思い出せる。

最初の頃はお互いに交わす言葉は少なく、素っ気ない会話ばかりだった。

まともな会話をする様になったのは彼女が男女と馬鹿にされ、イジメを受けていたのを助けた時からか

馬鹿にされている彼女を抱き寄せ、ただ相手に向かって一言

「黙れ」

それだけで彼女にイジメをする者はいなくなった。

子供なら気絶する寸前の殺気をぶつけたのだから当たり前である。

ちなみに一夏は気づいていないが、この時の箒の一夏を見る眼は王子様を見る眼だったらしい

それから一夏は箒を抱き寄せて胸の中でひとしきり泣かせた後に元気づける為に彼女の額にキスをした。

これは精神が子供の扱いに慣れていない独り身のオッサンである一夏が、胸で泣いている箒をどう元気づけようか必死に考えていると

唐突に前世で唯一の子持ち（親父として色々ダメな美丈夫は除外）で子育て経験のある同僚ならどうするかと思いついた結果である。

効果は抜群だった。むしろ抜群すぎた。

何故なら、その直後に同僚だった白騎士の如く神速の速さで走り出したのだから

その時の感想は

「・・・どうやら元気になった様だな。感謝するぞ、バビロン」

何処かで困った様に苦笑しながら“やっぱり兄弟かしらね？”と自分が育てた曾孫に言うFカップの巨乳美女が居たとか何とか・・・そろそろチャイムが鳴る頃だろうと思った一夏は過去の思い出から帰還して箒に言った。

「話したい事はまだ有るだろうが、そろそろ鐘が鳴る頃だ、戻るぞ。」

「

「そう・・・だな」

少し残念そうな表情になる箒を見て一夏はやれやれと言った様子で溜息を吐くと

「・・・箒」

彼女に急接近し

「なッ、ななな何だ？」

箒の頬が赤く染まるのにも構わずに

「綺麗になつたな」

そう言つて昔の様に額にキスをした。

「~~~~~」

「??????」

箒は顔がものすごい勢いで真っ赤に染まり、ぶしゅう~~~~と蒸気を出し

まるで蒸気機関車の如く、猛スピードで教室にすっ飛んで行った。

「・・・熱でもあつたのか？」

当の本人だけが何も分かつていなかった。

“やっぱ、罪造りな男だよね。あのマキナがあんな事するなんて思わなかつたけど、流石は藤井君のお兄さんって思えるよね？”

と、また何処かで、好意を抱く自分の後輩を弄るクォーターの少女が居たとか何とか・・・

その後、授業に無事、間に合った二人であったが、篝の方は顔を真っ赤にしながらもどこかニヤけており

千冬は、またコイツかと言いたげな表情で一夏を見ていたのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

当の本人はやっぱり気づいて無かった。

第二話（後書き）

なんかマキナがキャラ崩壊を起こしている気がしなくも無い
リザさんと玲愛先輩は完全な傍観者の場所にいます。

直接、話に関わることはありません。
多分ね

第三話（前書き）

今回、マキナー夏を喋らせ過ぎた。

キャラが崩壊している様な気もつとしてきたぞ？

・・・やっべえ、お気に入り登録している人が意外と多いぞ
プレッシャーは無い（キリッ）と言いたいけど・・・

・・・うん、やっぱり無理

第三話

「~~~~であるからしてISの基本的な運用は~~~~」

一夏が箒と教室に戻ってきてから、現在二限目の授業を受けている。相変わらず一夏は無表情で教科書を見ていた。

箒の方はぶしゅくと顔を真っ赤にしながらも何とか授業を受けている。

流石にその様子を不審に思ったのか

「えっと・・篠ノ之さん？」

「は、はいッ!？」

「随分と熱っぽそうに見えますけど大丈夫ですか？」

「も、ももも、勿論です!大丈夫です!」

物凄い動揺しながらも答える箒

その様子にクラスメイト達の乙女センサーは教室に戻ってきた様子やそれからのニヤケ顔と蒸気噴射から、休み時間に絶対何かあった!と確信するのだった。

「ちょっとよろしくて?」

「・・・む?」

二限目の休み時間、今度は金髪縦ロールのお嬢様が一夏に話しかけた。

「なんですの! そのお返事。私に話しかけられるのも光栄なのですから

それ、相応の態度と言う物があるのでは無いかしら?」

それを聞いた一夏は即座に脳内情報を検索、該当する人物を探し当てる。

「英国の代表候補生か・・・」

「その通りですわ。名前まで覚えていらっしやらないのは、如何なのかしら?」

「覚えていない訳では無い。セシリア・オルコット」

ジロリとセシリアを見ると、ぶっきらぼうに言う

「何の用だ?」

「まあ! 何て物言いでしょう!? 本来、私の様な選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡なのですわよ? その辺りをお分かり頂けるかしら?」

「そうか・・・幸運だ。」

「馬鹿にしているのですか!?!」

喰ってかかるセシリアと我興味無しと言った様子の一夏

まるで構って欲しい犬が吠えてくるのを適当に相手する飼い主にも見えなくない

「ふ、ふん! まあ、よろしいですわ。何か分からない事が有ったら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ!

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから!」

ある程度落ち着いたセシリアが偉そうに言うが

「俺も倒した。」

「・・・・・・は?」

セシリアだけで無く、会話を遠巻きに見ていたクラスメイト達まで

呆けた声を上げた。

「わ、私だけと聞きましたか!？」

「女子では、な」

「で、では、私だけでなく貴方も倒したと言うのですか!」

「ああ」

「どうやって!？」

ガアツと再び食って掛かるセシリア

教官を倒したと言う事に興味深そうに眼をキラキラ輝かせているクラスメイト達

彼女らに説明するように一夏は語る。

「突撃したら、向こうの方も突撃してきた。」

「それで?」

「懐に入った。」

「そして近接武器を使って倒したと?」

「頭掴んで地面に叩きつけた。」

「……………ひどっ!!!」「……………」

実際、相手になった真耶は凄まじい速度で地面に叩きつけられた衝撃で気絶

そのまま追撃してもう一方の拳を叩き込もうとしたら

ブザーが鳴って試験が終了した。

まさか高空から地面に顔面を叩きつけられるなんて経験したのは彼女が初めてだろう

意識を取り戻した真耶はその時の記憶が飛んでいたらしい

おそらく精神の安定を図るために脳が記憶から消去したのだろう

その後、千冬に“お前は教官を潰す気か!”と怒鳴られた。

すると、チャイムが鳴りだした。

「ッ!…っ、続きはまた後ですわ!」

セシリアは捨て台詞を吐くと自分の席に戻ってゆく

三限目の授業を終え、今は四限目の授業だ。

「これから再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。クラス代表者とは、そのままの意味だ。対抗戦だけで無く、生徒会の会議や委員会にも出席する。まあ、クラス長の様なものだ。クラス対抗戦とは入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差は無いが競争は向上心を生む。一度決まれば余程のことが無い限りは一年間変更は無い。その点を踏まえておけ」

教壇に立った千冬が全員に言い放つ

いつも通りの一夏は興味が無いとばかりに腕を組んで千冬を見ている。

「はいっ！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！！」

クラスメイトが次々と一夏を推薦する。

「では、候補者は織斑一夏・他にはいないか？自他推薦は問わないぞ？」

それに反論する声が上がった。

「待って下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言うのですか！？」

更にセシリアは捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！！大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛でしか——「下らん」何ですって？」

一夏の言葉の端々には怒りの感情が感じられた。

「下らんと言った。クラス代表になるのであれば、国家の代表候補生ならば

他国を国を侮辱する言動は慎め、英国には礼儀と言う物が無いのか

？」

普段寡黙な一夏がここまで喋るのは結構怒っていると云う事だ。

「なっ、私の祖国を侮辱しますの!？」

「先に侮辱したのは貴様だ。英国人^{ライミー}」

イギリス人への侮辱の言葉を言われたセシリアは

「決闘ですわ!！」

「良いだろう」

前世で黒騎士と呼ばれた男に挑戦状を叩き付けた。

「もし私が勝つたら小間使い!いいえ、奴隷にして差し上げますわ

!！」

「俺が勝つた場合はどうするつもりだ？」

「そんな事、万が一にもあり得ませんわ!

もし貴方が勝つたら奴隷でも何でもなつて差し上げますわ!！」

まあ、そんな事あり得ませんが!と云うセシリアに一夏は問う

「手加減はどうする?」

「あら、早速お願いかしら?」

「違う、俺の手加減だ。」

するとクラス的女子が一斉に笑い出す。

「織斑君、それ本気で言ってるの?」

「男が女より強かったのつて大分昔の話だよ?」

口々に言うクラスメイトが言うが、下らなさそうに一夏は語る。

「それは女がISを使えるからだ。女が男に対しての絶対的優位性を持つISを

男の俺が使える。それがどういう意味か分かるか?」

その言葉にクラス中が押し黙る。

「それにIS以外の肉体的要素は男の方が上だ。学力は本人次第で如何にでもなる。」

つまり、と一夏は続ける。

「ISが使える事以外で男女に差は無い」

俗物共の政策で女尊男卑の社会が作られただけだ。

と見事に政治家を敵に回す発言を一夏はした。

「話が逸れたな・・・尤も、俺と貴様に経験による差があるのは否めん。」

だが、決闘に手加減を加えるのも誇りに反するか・・・」

一夏はそう言ってセシリアを見据える。

「良いでしょう！私の誇りに掛けて貴方を全力で倒して差し上げますわ」

その言葉に一夏は僅かにニヤリと笑った。

それに気づいたのは筈と千冬の二人だけであったが・・・

「さて、話は纏まったな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う」

織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように」

千冬がそう言って纏めると、授業が始まったのだった。

第三話（後書き）

さっさと原作買って読まない和不味いな・・
金使いたくないから中古で買おうと思うけどあるかな？
大学生なのにバイトが出来ないのはキツイ
感想をくれるともっと嬉しいです。

第四話（前書き）

感想をくれた皆様、お気に入り登録をしてくれた皆様
本当にありがとうございます。

皆様方の応援や感想を見ると、本当にこの作品を投稿して良かった
と思えます。

これからも、よろしくお願いします。

さて、今回の話は、ネタ有り、エロ有り、笑い有り、青春有り、と
様々な劇が繰り広げられます。

ゆえに面白くなると思うよ

では読者の方々、彼ら彼女らの織りなす劇をご覧あれ（ニート風）

第四話

押し倒した彼女の糸纏わぬ裸体が一夏の眼に映る。

上気した彼女の頬

シャープな輪郭の顔

凜とした意志を感じさせる眼

ベッドの上に広がる濡れた黒髪

豊かな胸

ほっそりと引き締まった体のライン

くびれのある腰

しなやかに引き締まった脚

それらが集まり一つの芸術品であるかの様な美しさを醸し出している。

そして目の前の彼女は初夜を迎える生娘の様に

「一夏……」

その瞬間を待つように目を閉じる。

第四話

話は放課後に戻る。

本日の授業も終わり、授業の復習の為に教室に残っていた所へ真耶がやって来た。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。良かったです。」

「何か？」

「えっと、織斑君が生活する寮の部屋が決まりました。」

「……自宅通い」

少なくとも一週間は自宅通いと言う事を一夏は聞かされていた。すると真耶はこっそりと耳打ちしてきた。

「そんなんですけど、事情が事情なんで一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したみたいなんです。・・・その辺りの事は政府から聞いてます?」

一夏は首を横に振った。しかし一夏は事情を理解した。

本来なら女性にしか動かさないはずのISを動かした唯一の男性操縦者

その価値は計り知れないものだ。

入学式になる日まで自宅の前にはマスコミがたくさん集まって来ていたし

解剖させてくれ、体を調べさせてくれ、等と言ってきたマッドまで居た。

仕方なしに取材を受けた時の受け答え

「世界初の男性IS操縦者になった気持ちには?」

「どうでも良い」

「やはりあのブリュンヒルデの弟と言った所ですね」

「下らん、俺は姉の付属物では無い」

「何か一言を!」

「特にない」

「研究させてくれ！」

「貴様が永遠に呼吸しないで生きていたらな」

と最後に変なのが混じっていたが、いつもの調子で受け答えしていた。

「と言う訳でして、政府の特命もあつて織斑君を寮に入れる事を優先したらしいです。」

「一月もあれば個室を用意できるので、それまでは相部屋で我慢してください」

ふむ・・と一夏は顎に手をやってから気づいた。

「荷物は？」

「それなら私が手配した。ありがたく思え」

「姉・・織斑先生が？」

荷物などは一週間後から運ばれてくる様になっていたが

どうやら千冬が手を回してくれたらしい

「相変わらず、何も無い部屋だったかな・・」

その言葉に真耶が驚いたように千冬に尋ねる。

「えっ、織斑君って私物が少ないんですか？」

「ああ、昔からこいつは必要最低限の物しか持たん。」

「じゃあ、趣味とかは・・・」

「強いてあげるとしたら、料理や家事か？」

「それって一般の男子から離れているんじゃない・・・」

「家事が出来ない姉を持つところな、ぶっ!!!?」

最後まで言い切る前に千冬のチョップが一夏の脳天に直撃していた。

「人の個人情報を漏らすな」

「・・・弟の個人情報は良いのか？」

「お前は私のモノだ。拒否権は無い」

誤解を生みそうな発言である。

現に真耶は顔を真っ赤に染めて、イヤンイヤンと体をくねらせている。

「・・・・・・・・不条理だ。」

「弟は姉に逆らってはいけないと決まっている。」

常識だろうか？と千冬は言い放った。

姉が白と言えは何色であるつとも白、黒と言えは何色でも黒

それが織斑家の不文律であり、絶対の法則

姉と言う座から流れ出た法則である。

『流出：絶対に君臨せし姉』である。

「とにかく四の五の言っても何も変わらん。生活必需品だけで充分だろう?」

「俺のレシピは・・・?」

その言葉に衝撃を受けたかのように固まる千冬

「くっ、不覚!この私がまさか一夏のレシピを忘れるとは・・・」

そのレシピには今まで一夏が培ってきた料理だけで無く、

マッサージ等の技術やテクニックまで書き記してある。

正に一夏の技術が詰まった秘蔵の書である。

別名、シスコン白書

全てが千冬の為に習得した技能であるのだが・・・

彼女に養われていた一夏はせめて自分が出る全ての事をしよう

彼女の為に出来る事を死にもの狂いで習得していったのだ。

その話は置いておいて

一夏は真耶から渡されたメモ用紙に書いてある番号の部屋1025室へと向かっていた。

部屋に入ると、そこら辺のホテルとは比べ物にならない程の設備だった。

取り敢えず自分の荷物に入ったダンボールを確認した直後

「ああ、同室の者が。こんな格好ですまないな。私は篠ノ之ほう・・・き・・・」

シャワー室からバスタオル一枚の姿で出てきた筈の姿が・・・

「「「「「「「「」」」」」」」」

バスタオルを体に巻いているのではなく、体に押さえつけている状態の為

結構、きわどい所まで見えていた。

まず目に付くのは、バスタオルで隠しきれない程の豊かな胸の膨らみ

幼少の時に見た幼女の裸では無く

成熟した体つきとアジア系の未熟な顔つきという

アンバランスであるが故の魅力があった。

随分と女らしくなった成長したものだな・

と、約2秒でここまでの評価をした一夏を凄いと言っべきか

箒は、そんな一夏を見ながら肩を震わせている。

「・・・寒いのか？」

「ぎゃあああああああッ！！！！」

悲鳴を上げると同時に、箒は部屋に置いてあった竹刀を取り

一夏に向けて振り下ろす。

躲す素振りさえ見せなかった一夏は、そのまま脳天に一撃を受けて倒れるかに思えた。

が、ここに居る一夏はただの一夏では無い

バシィ！と右手で竹刀を掴んで受け止めると、

勢い良く自分の方へ竹刀を引き寄せる。

同時に竹刀を握っていた箒もそのまま引き寄せられ一夏の胸にダイブする。

その勢いそのまま箒を抱き寄せ半回転して、彼女をベッドに押し倒す。

両腕を押さえつけ抵抗できないようにする。

「落ち着け」

そう言っただけ彼女の姿を改めて見る。

バサツと幾分か水分を吸って重くなったバスタオルが落ちた音が響く

そして冒頭に戻る。

「一夏・・・」

何かを待つ様に目を瞑る箒を見て

流石の一夏も何をすればいいか分かっていた。

「箒・・・」

チュツという音が彼のキスした所から聞こえた。

彼女の頬から……

「ふえっ？」

箒は自分が予想していた場所とは違う所にキスをされて

驚いた様にも、残念そうな様にも聞こえる声を上げたのだった。

「落ち着いたか？」

一夏は彼女の顔を覗き込みながら聞いた。

「あ、あう……」

プス・・プス・・プシューと先刻と同じ様に顔が真っ赤に染まり蒸気を噴き上げる箒

一夏は顔が近いから話しづらいのだろうと思い、顔を離れた。

成熟した箒の体を改めて見ると大人顔負けのプロポーションである事が分かる。

箒の全裸、二つの母性の頂点とか下腹部の成長具合と言った

本来隠されているべき場所までしっかりと見ていた。

まあ最近では色々と解禁されているから、直接的な描写が無ければ問題無いだろう。

と、一夏がメタな事を考えた瞬間、部屋のドアが開かれ

「なんか凄い悲鳴が聞こえたけど、大丈夫!？」

「何、どうしたの!？」

「何があったの!？」

箒の悲鳴を聞きつけた女子生徒達が突入してきた。

「……………あ……………」

その場にいた全員の声が重なる。

今の一夏と箒の状況を見て、第三者はどう思うか？

制服姿で全裸の女子を押し倒し、抵抗できない様に腕を抑えている
男子

状況証拠的に言い逃れは出来ない状況である。

このままでは一夏が性犯罪者となってしまう!!

と、約0.2秒で判断した箒は無我夢中で口を動かしていた。

「ち、違うんだ!これは……私と一夏の訓練だ!！」

その発言がどれほどの誤解を生み出すのかも知らずに……

一夏と篝の親密さは休み時間の様子から、

即座に学園中とはいかないが同学年の生徒たちの間では広まっていた。

そして明らかに性犯罪としか見えない状況で言い訳しているのが男では無く、女の方

それらを加えて彼女たちが下した判断とは

「「「「「「し、失礼しました！！どうぞごゆっくり~~~~」」」」」」

「だから、誤解だアアアアアアツ！！！」

無慈悲にもドアがバタンと閉められた。

“これで明日には、一夏と自分はこういう仲だと学園中に広まってしまうのだな・・・”

そこまで考えた篝は「おや？」と考える。

“あれ？むしろ、これで私と一夏は公認の仲になったのでは？”

と、乙女的思考回路が神速の如き速度で答えを導き出した。

“し、しかし、なし崩し的に一夏とそっいう仲になるのは如何か？”

と、今度は篝の良心が咎める。

女神で天然で巨乳の金髪碧眼フランス娘に終了させられたのだっ
た。

決して、

育てられた環境のせいで世渡りが上手く

高い人気を誇る尽くしてくれる系の男装美少女では無い

部屋の外に出た一夏は箒が着替えるのを待っていた。

少し時間が経ってからドアの向こうから箒の声が聞こえた。

「入れ・・・」

ドアを開けて、部屋に入ると剣道着を来た箒が立っていた。

その顔はかなり真っ赤に染まっており、体が震えている事から
相当な羞恥心に身を焼かれているのだろう

まあ、意中の男に風呂あがりの姿どころか

フルヌードを見られてしまったのだから、無理も無いだろう。

こうして顔を合わせるだけでも、必死で耐えている事が分かる。

対して、一夏は表情を変える事も無く

「すまなかつたな、箒」

深々と頭を下げるのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・沈黙が二人の間を支配する。

未だに頭を下げたままの一夏、何を話せばいいのか迷っている箒

二人の間で時間だけが過ぎ去ってゆく

「とりあえず、頭を上げる・・・」

箒がそう言うと一夏は頭を上げ箒を見る。

彼女は顔を紅く染めたままだった。

「さっきの事は水に流そう、それの方がお互いの為だ・・・」

「そうだな・・・」

このままでは何時まで経っても、お互いにギクシャクしたままだ。

ならば水に流してしまった方が良く、と箒は考えたのだった。

かなり惜しい事をしたとは思うが、

これからの生活で一夏との仲がギクシャクして話し辛くなるよりはマシだ。

それに同室で一緒に過ごすならば、まだまだチャンスはある。

“モッピー知ってるよ、一夏はこんな18禁ハプニングでは揺らない男だったこと。”

箒の脳内に座す軍師モッピーは己の知識を総動員して

状況を判断し、箒にとっての最善の決断を導き出したのだ。

（感謝するぞ、モッピー！）

形容し難い笑みを浮かべるデフォルメキャラに礼を言う箒

“箒にとって最善の未来を導くのがモッピーの役目だって知っているよ”

そんな声を残してモッピーは己の内に帰って行くのだった。

二人はとりあえずベッドに腰掛ける。

「お前が私の同居人なんだな・・・」

「嫌か？」

何て事も無いように聞いてくる一夏に箒は

「別に嫌と言う訳では無いんだ・・・しかし“男女七歳にして同衾せず”と言っただろう?」

軍師モツピーの助言で幾分か素直になっただらしい

「ああ・・・俺もそう思う」

だが、と一夏は続ける。

「国からの要請だ。仕方無い」

やはり一夏は大人だった。

「それに幼馴染であるお前と一緒にの方が落ち着く」

「そ、そうか、私と一緒にの方が落ち着くのか・・・嬉しいものだな」

そう呟いた筈の笑みはとても優しげで、綺麗だった。

「何故だ?」

「昔から一夏には助けられてばかりだった・・・だからお前に頼られるのは嬉しい」

「そうか・・・」

何時しか二人の間には春の陽だまりの様に優しい空気が流れていた。

と、ここまでならいい話で終わったのだろうか……

ふと、視線を感じた一夏がドアの方を見ると

じ~~~~~と、ドアの隙間から見ている乙女達が居た。

自分の部屋に戻っていたかと思いきや、最初から見ていたらしい

ニヤニヤと二人の甘酸っぱい青春劇をゆっくり鑑賞していたらしい

主に同じ乙女である筈の方ばかりだが……

この劇の主役は一夏では無く彼女の方だったらしい

「……鍵をかけ忘れたな」

「きゆう」

流石に羞恥心の限界を突破したらしい筈は

珍しく可愛らしい声を上げて意識を手放したのだった。

「篠ノ之さんも乙女よねえ……」

「うんうん」「うんうん」

三年生の先輩の一人の言葉にみんなが同意した。

“ やれやれ、だな…… ”

一夏は仕方ないとばかりに筈をベッドに寝かせると彼女の頭を慈しむ様に撫でる。

“ 少しは成長したと思ったが、まだ未熟な子供だな…… ”

まるで彼女の兄か父親の様な事を思いながら、彼は来客者の相手をするのだった。

どうやら神は意外と恐怖劇以外の演出もするらしい

第四話（後書き）

はい、どうでしたか？

今回は前回の三倍以上の文字量です！

気づいたらこうなっていたんだ。

一回これ、自動的にやり直しになったから

はっちゃけた文は無しにします。

勝手にユーザートップに戻った時の脱力状態で今、必死に書いてます。

さて次回は、決闘までの日々を短い話で書くか、抜かして決闘を書くか、悩んでいます。

後、詠唱にゲーデやアーサー・ハーバートの詩をそのまま使おうと考えてますが

著作権とか、大丈夫ですよ？一応、コピーしたサイトには違反していたら削除しておきますって書いてあったから・

ただ、セシリアとの対決はある意味、期待を裏切るかもしれません

と言って置きましょう、だって、大学の講義中に思いついたんだものセシリアとの決闘は当初予定を変更します。とだけ言って置きます。

まあ、変わるかもしれないですけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189x/>

IS～インフィニットストラトス～黒騎士は織斑一夏

2011年10月22日02時14分発行